

2017年1月23日

博士学位審査 論文審査報告書 (課程外)

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 追川 吉生
学位の種類 博士 (人間科学)
論文題目 (和文) 江戸の大名屋敷の考古学的研究
論文題目 (英文) Archaeological Study of *Daimyo* Residences in Early Modern City Edo

公開審査会

実施年月日・時間 2016年12月12日・13:30-14:30

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第4会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位 (分野)	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	谷川 章雄	博士 (人間科学)	早稲田大学	考古学
副査	早稲田大学・教授	蔵持不三也	博士 (人間科学)	早稲田大学	文化人類学
副査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士 (文学)	早稲田大学	文化人類学

論文審査委員会は、追川吉生氏による博士学位論文「江戸の大名屋敷の考古学的研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 大名屋敷における金属加工の実態はどのようなものであったのかという質問に対しては、藩邸内の職人がこれを行い、製品は藩邸内で使用されるとともに商品化したものもあったという回答があった。
- 1.2 近世都市江戸の大名屋敷の位置づけと変遷について質問があり、大名屋敷は江戸の面積の約25%を占めており、時代が下ると上屋敷以外の中屋敷や下屋敷が増加していったという説明がなされた。
- 1.3 江戸の大名屋敷の代表的な発掘事例についての質問に対しては、東京大学本郷キャンパスの加賀藩前田家本郷邸、自衛隊市ヶ谷駐屯地にあった尾張藩徳川家市谷邸、シオ

サイトの仙台藩伊達家芝口邸などがあるという回答があった。

- 1.4 大名屋敷の防火対策はどのようなものがあったかという質問があり、瓦葺き建物、火災のときに家財道具などを避難させる穴蔵、長屋塀などであるという回答があった。
- 1.5 以上のように、公開審査会において行われた質疑応答では、申請者は質問に対して適切に回答していた。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

特になし。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は大名屋敷の空間構造を発掘された遺構・遺物によって明らかにしようとするものである。具体的には、大名屋敷の屋敷境遺構および大名屋敷内の区画遺構という大名屋敷の空間を画する遺構、畑・花壇などの栽培・耕作遺構および金属加工という生産活動に関する遺構・遺物をとり上げ、その分類を行なうとともに、変遷と歴史的背景を考察することを目的としている。従来、大名屋敷の空間構造に関しては、歴史学による屋敷絵図の分析をもとに「御殿空間」と「詰人空間」という分類が行われ、それと発掘された遺構・遺物を対比するという研究が行われてきたが、本論文では、具体的な大名屋敷の空間を画する遺構や生産活動に関する遺構・遺物によって、大名屋敷の空間構造について体系的かつ全面的な検討を行なった。このように、本論文の研究目的は明確であり、かつ妥当なものであると判断される。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、これまで発掘調査された大名屋敷の数多くの事例を渉猟し、遺構の精緻な分類を行なって変遷および歴史的背景を考察するという方法がとられている。とくに、遺構を分類してその遺構に伴う遺物の年代観に基いて変遷を明らかにするという方法は、従来の考古学が一般的に採用してきた研究方法である。また、そうした遺構の変遷の歴史的背景を考察する際には、歴史学の成果を含めた総合的な解釈が行われている。こうした本論文の方法論は、近世考古学をはじめとする歴史考古学においてとられている総合的叙述に基づくものであり、明確かつ妥当なものと言える。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、以下のような研究成果が認められる。
 - ①大名屋敷の屋敷境の遺構を7形態（素掘りの溝、石組溝、柱穴列のある溝、柱穴列、土坑列、堀、石垣などの土留め）に分類し、その変遷を明らかにした。その上で7形態の一つである大名屋敷を画する堀に着目して、高い下水処理能力が期待された下水道としての堀、大名屋敷の権威性を示す堀、下屋敷を囲う施設としての堀という三つのあり方を示した。また、『江戸図屏風』などに描かれた瓦葺きの長屋塀すなわち表長屋の出現時期を遺構の分析から寛永期（1624～1643）とした。
 - ②大名屋敷内の塀・柵、堀、土手・土塁などの区画遺構を「御殿空間」「詰人空間」との関係において検討し、「御殿空間」は堅固なつくりの区画遺構によって画された高い空間であり、しかも区画遺構によって視界が遮蔽された空間であることを明らかにした。
 - ③大名屋敷

内の畑・花壇などの栽培・耕作遺構のなかで、「詰人遺構」にあるものは長屋に隣接しているもの、空閑地に設けられているものがあることを指摘した。④大名屋敷内の金属加工の遺構・遺物は、江戸府内の屋敷で行われた小規模な生産と郊外の下屋敷などの屋敷で行われた大規模な生産のあることが明らかにされた。⑤大名屋敷を8類型に分類して変遷を述べるとともに、江戸の大名屋敷は天正18年(1590)の家康入府に始まり、17世紀半ばの景観的規制と屋敷内の諸活動によって多様化して、幕末まで展開したことを指摘した。こうした本論文の成果は、数多くの事例を詳細に分析したものであり、明確かつ妥当な論旨に貫かれている。

- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 これまで近世都市江戸の遺跡から発掘された大名屋敷の数多くの事例をとり上げ、精緻な分類を行ない、その変遷および歴史的背景を考察したこと。
 - 3.4.2 大名屋敷の屋敷境遺構および大名屋敷内の区画遺構という遺構によって大名屋敷の空間構造を論じたこと。
 - 3.4.3 大名屋敷の畑・花壇などの栽培・耕作遺構および金属加工という生産活動に関する遺構・遺物を体系的にとり上げたこと。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 江戸の大名屋敷の空間を画する遺構や生産活動に関する遺構・遺物に関する体系的かつ全面的考古学的検討によって、従来の歴史学による大名屋敷の空間構造についての研究を具体的かつ詳細なレベルに進展させたこと。
 - 3.5.2 大名屋敷の発掘調査は近世都市江戸の考古学的調査・研究の中心的存在であったが、これまで蓄積された発掘調査のデータの分析によって新たな都市史研究の切り口を提示したこと。
 - 3.5.3 加賀藩前田家本郷邸や尾張藩徳川家市谷邸など雄藩の大名屋敷は江戸の地域社会の中核であり、その様相が明らかにされたことによって、江戸の都市論全体につながる可能性が生まれたこと。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
 - 3.6.1 考古学的方法に基づく分析を積み重ねた上で、歴史学の成果を援用した歴史的背景の考察を行なった研究であり、人間科学における物質文化研究の学際的方向の一つを示したこと。

- 4 本論文の内容(一部を含む)が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

学術論文

追川吉生:2000 本郷邸の御殿空間—考古学からのアプローチ—。加賀殿再訪, 東京大学出版会, pp. 118-132.

追川吉生: 2011 総論・近世都市江戸の考古学. 考古学ジャーナル, 623号, pp. 3-6.

Oikawa, Yoshio. : The Archaeology of Early Modern Times in Japan: The Case

Study of Feudal lord' s Residence . The Journal of Antiquity. (印刷中)

追川吉生: 2017 栽培遺構からみた大名屋敷における植物栽培の諸様相. 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要, 10号.

追川吉生: 2017 大名屋敷の屋敷境一屋敷境としての堀を中心に一. 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要, 10号.

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上